

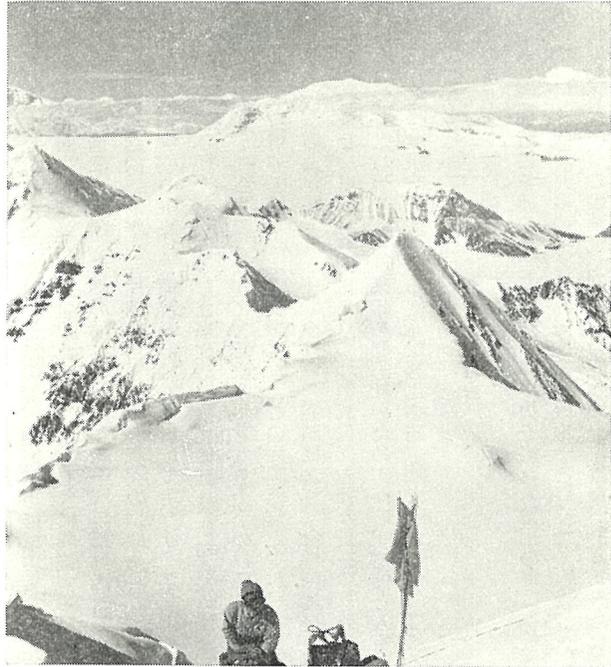
アラスカ紀行

—その二—

北村 泰一

偵察飛行

基地ができたらずぐ登山隊を第一前進基地ABC¹へ輸送すると約束したウィルソンはまだこない。貴重な晴天が無為に三日も過ぎてしまった。クウィルソン今日はどこまで行



ブラックバーン頂上付近

ったやら、焦燥感をこんな歌でまぎらせる。

十三日、故障していた無線機が荒木、川井両君によって、やっと働くようになった。早速ウィルソンを呼出すと、応答があつて午後二時に行くという。基地はにわかには活気づく。爆音高く飛来した一番機に、まず自分が乗り

こむ、機上からリーガル (Regal, 四三三三)、ブラックバーン (Blackburn, 五〇三六) 二峯の登路を見つけ登頂のための前進基地ABC¹・ABC²の位置を定めなければならない。登山計画には、上の二峯を結ぶ尾根の縦走も含まれてはいるが、時間的にみてちょっと難しいだろう。

ランゲル山脈 (Wrangel Mts.) 中の主峯ブラックバーンは一九一三年ドラキーン隊 (アメリカ) により、また、一九五五年同じくアメリカのブルーマ隊によって登頂されたと言われている。しかしチストチナで会った老人はこのドラキーン隊について面白い話をしてくれた。すなわち、彼は元ガイドで、一九一三年のドラキーン隊に参加して途中まで登った。頂上近くまで行った仲間のガイドの話によると、登頂の日、ドラキーンたちは嵐をついて出かけ、間もなく帰ってきて、登頂したと言ったが、あの嵐の中で登頂できる筈がない、と言うのである。ひょっとするとドラキーンは偽登したのかも知れないが、五十年前の話を今さら詮策しても仕方がない。それより自分たちの登頂に全力をつくすべきだ。基地を飛び立った機は氷河を上流へ向う。

見下すと幾筋ものモレーンがまるで自動車道
路のように下流へ走り、山ぎわには数十頭の
山羊 (Mountain Sheep) が群をなしている。
登った人はもちろん、文献も写真もないリ
ガルとはどんな山なのだろうか。はじめて見
合いをする時の気持ちにも似た心のときめき
を押えることができない。前衛峯の岩壁をす
ぎると視野が一度に開ける。くしめたノこ
れならいける。ノ西北尾根はクレバス (Cre-
vasse) が多く余りにも長い。南尾根か、ダイ
レクトに頂上に続く西尾根を登るべきだ。リ
ガルはこれでよし。機はブラックバーンに
向いて間もなく縦走路にさしかかる。おお、
これは悪いノ。鋭いナイフエッジが延々と続
いている。このあたりでは五〇〇〇級の山
の頂付近は非常に穏かな相を呈しているが、
三〇〇〇級の山の多くは絶壁と鋭い稜線に
囲まれ、しかも岩質が極めてもろい。縦走は
諦めざるをえない。

ブラックバーンが見えてくる。登る予定の
東北尾根に目を注ぐ。下半部はよし、だが上
半にさしかかるところが悪そうだ。もっと近
づく、ああ、これは絶望的だノ。下半と上半
を連結する尾根の面側は一―二マイルにわた

って一〇〇〇呎以上もなき落ち、そのドンゾ
マリに急傾斜の永壁が立ちほだかっている。
四名ではこの悪尾根の輸送はとも続けられ
まい。しかし、ここを放棄すれば六年前のア
メリカ隊と同じ尾根を登らねばならない。一
つ勝負に出るかノ。ルートを変更しても安全
だとは限らぬぞ。いや、しかし。何も知ら
ぬウィルソンは予定地の東北尾根の末端めが
けて降り出す。猶余はできない。くよし俺は
必ず勝てる勝負だけをしよう。

候補尾根の一つ中央稜も実際にみると雪崩
の危険が多く感心しない。北西稜が前二者に
くらべれば安全そうである。あの麓に降りら
れないか。旋回して調べていたウィルソンは
やがてOKのサインを出す。軽いショックと
共に着陸の眼前にこれから登ろうとする北西
稜がかなりの傾斜で立ちほだかる。高度二八
〇〇呎。雪崩の心配もない。ここにABC1
を作ろう。

鷲ノ巢キャンブ

七月十四日午前六時 松本君を最後に四名
がそろろう。八時出発。偵察を兼ねて目の前の
氷壁を登るのだ。肩の荷がずしりと重い。二

時間かかってやっと二〇〇呎登る。コルの向
う側のクスクラナ氷河 (Kuskulana Gl.) が
眺められる。雪崩の音しきり。六〇度ないし
七〇度の急傾斜。固定ザイルをどんどん使用
する。三五〇〇呎くらいから蒼氷が開始め
る。午後三時三〇分、突出した氷塊の蔭に一
坪ばかりの平坦地を見つけて荷物を下す。高
度三七〇〇呎、下からみた前衛峯にはまだま
だ及ぶまいが、これより上はなお傾斜が増し
ているので、ここをデポ地点にし、ABC1
に降りる。

十五日 気怠るい体にむち打って再び荷上
げ。四人で三〇〇kgの荷上げは相当なもので
ある。ヒマラヤなら、われわれサブ(且那)
はほんの個人装備だけで行けるのだが。若い
三人はほとんど進む。自分の年が感じられて
悲しい。それでも好天続きで、昨日のトレ
ースが消えないのが幸いして、三時間早くデポ
地点につく。更には上を偵察してきた川合、松
本両君が、これから上四〇〇〇呎までは蒼氷
と雪の急傾斜で、今までのルートの中では最
も悪いと報告したので、このデポ地点を正式
に第一キャンブ (C1) と定める。氷塊の蔭
のせまいスペースにテントを張る。足下は、

一〇〇〇フィ以上もなき落ち、ランゲル山群が一望できる絶景の地である。この地を中天にかかるキャンプという意味で鷲ノ巣キャンプと呼ぶことにした。

十六日 快晴。三度目の荷上げ、体もようやく慣れてくる。夜、ウイスキーを飲みながら登頂作戦をたてる。鷲ノ巣キャンプから頂上までは高距一二〇〇フィ、ダッシュで行けない高さではないが、確実に登るためにはもう一つキャンプが必要だ。第一登頂隊に川井、内藤両君、第二登頂隊として松本君と私を決め、第二登頂隊は第一登頂隊を支援して、翌日第二キャンプ(C²)を建設することにした。当然、第一登頂隊に選ばれると思っていた松本君は、日頃の穏やかさにも似ず、むつりと黙りこんで、早々と寝込んでしまった。気の毒だが、全体のバランスをとるためには我慢してもらわなければならない。

十七日 三時起床。空は都厚い雲にとざされ、風一つなく嵐の前の静けさといった不気味な感じ。今日は荒れそうだ。六時、鷲ノ巣キャンプ出発。川井、松本両君が一〇〇フィの蒼氷の壁にステップを切ってゆく。彼らの技術は信頼できる。私はただ後からついて行け

ばよかった。四一〇〇フィあたりから傾斜がゆるくなる。四四〇〇フィのところにC²を作る。少し早い为天候が悪化しそうだから急がねばならない。風は冷たく高所服を着てもゾクゾクする。軽い頭痛がする。呼吸をいくらしめてもしたりない感じだ。第一登頂隊をC²に残し、鷲ノ巣キャンプに降りる。一時間ほどして猛然たる風が吹きます。今にもほりさけんばかりのテントのはためき。テントのすぐ上の氷塊の角を切る風は悪魔のわめきにも似て、この絶壁にかかる小さな鷲ノ巣キャンプを狂騒の場と化した。あの蒼氷の急斜面でこの嵐に遭遇しなかったことを喜びあう。

ブラックバイン登頂

十八日 五時出発。嵐もおさまり、絶好の登頂日和。今日はC²から第一登頂隊が登頂し、われわれはC²まで登る予定。しかし好天に恵まれ、体の調子がよければ同時登頂も可能だ。サブザック軽装の快適さ。二時間でC²着。第一登頂隊が四時間前に出発した事を知る。

C²から上はだだっ広い尾根。ヒドンクレパス(Hidden Crevasse)だけが恐ろしい。昨

日の頭痛は治っていたが、C²を過ぎてから息切れ、立ちくらみが次第に激しくなってくる。四八〇〇フィより上は歩くことの疲れよりも、少しでも多くの酸素をいかにして吸収するかに努力が集中された。うっかりしていると呼吸が浅くなり、意識がモウロウとし恍惚状態になる。ハッと我にかえり、再び力一杯深呼吸する。

十時頃、第一登頂隊が降りてくるのに出会う。八時に頂上に至ったという。さすが一番若い内藤君も足もともがもつれてるように見えた。十一時三〇分、頂上に着く。まるで飛行場のようなだだっぴろい所だ。抱き合って喜び合うところだが、一向そんな感激がわかない。ああ、もうおしまいか、といった感じだ。これも第三登の悲しさかも知れない。一時間ほど周囲の山を写真に収める。遠くローガン峯やセントエライアスが望まれる。この好天に恵まれて快調に行動しているだろう日本の中のパーティの成功を祈った。

C²へ降りる頃から、往路あれほど好調だった松本君が頭痛を訴え始める。食欲もなくその夜は茶を軽く飲んだだけであった。自分は反対に往路より快調で、食欲も旺盛であっ

た。年長者ほど高所影響が早く現われるが順応も早いようである。

十九日は四名とも鷺ノ巣キャンプに泊り、翌日ABC₁に降りる。

撤収作戦

川合、松本両君をBCへ、内藤君と私とをABC₂へ輸送するため、ウィルソンが飛来する予定の二十二日から七日間は風、雪、ホワイトアウト(White out)の連続であった。こういうこともあろうかと無理して持って降りた食料が底をつきだし、自力で歩いてBCまで帰らねば……と考えていた二十九日、早朝のわずかの晴れ間をういてウィルソンがやってきた。しかし雪質が悪く、人や荷を積んでは離陸できないというので、ABC₁に荷物を半分残し、雪質のよい二二〇〇呎の地点まで永河を降りてウィルソンを待つ。だが今度風が強くて着陸不能。翌三十日、くもり空について空輪開始。川合、松本両君をBCへ、内藤君をABC₂へ送り出し、一人雪原に残る。ABC₁にはリーガル登頂に必要なものがかなり残っている。何とか取りに行きたいものだ。そう考えながら見ていると、

ABC₁には雲が周期的にかかったり消えたりしているようだ。更に気をつけて見ていると、ABC₁の北東ブラックバーンの正面氷壁の途中から雲が湧き出し、ゆっくりABC₁に移動して、まもなく消えることがわかった。周期を計ると正確に五〇分。十分ほど晴れて、また曇ってしまう。次にウィルソンが飛来する時間を計算すると、ちょうどABC₁の晴れる時間に相当する。これはしめした、もし今ABC₁の荷物を放棄すると、リーガル登頂が大変苦しくなる。そう考えているうちに爆音が聞えてくる。ABC₁はまだ晴れていない。飛行機から降りたウィルソンが、さあお前の番だぞとうながす。ふと見るとABC₁が晴れだしているではないか。今だ。このチャンス逃しては、とウィルソンに懇請する。あの場所はノーグッドだ。人間さえ無事に運べれば荷物は放棄してもよいではないか、とウィルソンは渋い顔である。自分の舌たらずの英語がもどかしい。いや、あそこにはリーガル登頂用の固定ザイルと小テントがあるのだと説明してやっと納得させる。ABC₁はまだ晴れている。さあ急がなくてはならない。十分間の晴れ間も

う三分過ぎた。ABC₁に着陸。雪が悪いとウィルソンは苦い顔。ハリアツプハリアツプとせかさねながらやつと荷の大部分を収容する。九分過ぎた。もうガスが湧いてきて、そろそろABC₁を包もうとしている。何度かエンジンをふかすが、雪の摩擦が大きすぎて機は動かない。降りて翼をけすぶる。やつと動き出す。飛び乗る。滑走。しかしスピードが出ない。普通なら三〇〇四〇呎で離陸するのに八〇呎すぎても一〇〇呎をこしても飛び上る気配もない。八〇〇呎先には大きなクレバスが口を開けて待っている。大丈夫かウィルソン。五〇〇呎を過ぎても楯はまだ雪面を滑っている。ウィルソンはブレーキをかけようとしなない。クレバスが見えてきた。みるみる迫る。南無三、失敗したか。あとクレバスまではんの二〇〇三〇呎ほどのところで体がフワリと浮く。大クレバスを一〇二呎下に見て、機は浮上った。やれやれ、ウィルソンもふり返ってニヤリと笑う。

やがて一路ABC₂へ。そこには長谷川君田中君の新手と内藤君が待っていた。さあ、これからリーガルだ。山のハシゴも楽ではない。

明日香の里



山崎 脩

飛鳥。それを「明日香」とも書くのを不勉強な私は、その時初めて知った。

そして、「明日の香りの里」とは、何と優雅な地名か。ゆるやかな丘陵の起伏の中に、枯すすきの穂が銀色にゆらぐ、その里に立つて私は新めて、かみしめるように「明日香」とつぶやいてみた。

途中の道路工事で、徐々にのびて来るアスファルトには反感さえ覚えるような、その村里の香りとおおらかさ。車から出ると、あわてて精一杯にそれを吸込み、ものやわらかな感懐にふけりながら、何よりそれが一刻でも長く続いてくれることを祈った。

ほとんどの京都や奈良の古寺のように、又、斑鳩いかるがの里でさえ、余りにも観光化し切って仕舞って魅力を失いかけて居る中で、明日香路にはまだまだ心を遊ばせ得る余裕が、わづかに残って居たのだ。

何時の頃からか、私は話や書物の上では、その里をさまよい先人の夢を様々に暖めて居た。渡来して来た帰化人たちの生活や、それらの勢力と文化を背景にして栄えた蘇我氏やその後の飛鳥の宮廷。多彩なその歴史は私にとって、あの澄んだ童話でも聞く思いを抱かせて居た。だからそのためにも明日香の里だけは私の思う通りにあってはしかなかったのだ

国道から丘陵に沿った田舎道に入ると周囲も一変し、時間と逆行して古きの儘の村里に近づく思いがする。

刈りとられた稲穂と残されたすすきの穂。赤土のなだらかな丘々……と、褐色の世界は行き先にふさわしく寂しく静かだ。行き交う人のほとんどないのが嬉しい。新緑の明日香路は知らないが、想像するに少くともこの村里を訪れるには枯れ始めた秋から冬、それに早春までくらいが適当のように思われる。小春日和もいいに違いない。

ただ、私は、少しでもそっとしておきたい気持でその里に近づいて行つた。

もう、京都の村里や古寺には、こんな気持が起るところは少ない。京都が観光都市であることに對しては文句もない。だが、やたらと、ぎすぎすした物欲げな雑沓と騒音には我慢出来かねるではないか。玄関口の駅前ビルの上にもまで無用な塔を押し立てて一体何を見ようと言うのだらうか。他都市にそれらが林立しても京都だけには安っぽい近代化らしき俗悪さは避けてほしいのだが。寺と言えば団体客から金を取ることに専念し、余りの醜悪な墮落にやり切れない気持がつのるばかり。

仏などどこにおわずだらうか。

しかし、私の明日香の里にもそんなアスファルト道路はのび始めて居た。近づいて見ると観光バスの駐車場は随処に当然のように出来上って居たのだから。

そして石舞台の前に出ると、入口に入場料を徴集する小屋があつた。徴集人の姿がなかったのはせめてもであつたが、見世物同様な小屋がけの切符売場には、いささかあわれを誘う。少くとも徴集することで史蹟が維持されるのならそれには反対も出来ないかも知れない。しかし、せめてもに数百米離れた所辺りで徴集して、その場所だけはそつとあるがままにしておいてくれないものだらうか。

石舞台が蘇我の馬子の墓であつたろうことは、私にとっては余り問題ではなかつた。その巨大な石組は寒空に空しく横たわつて居た。なだらかな傾斜と肥沃な土地のどこからこの巨大な石群は運ばれて来たのか。

その花崗岩系の巨石は酒摺石としても他の丘陵の一隅に、ぼつんとあつた。そこへ歩を運ぶ途中、枯葉の下からのぞかれた非常にキラ（雲母）の多い粘土質の土壌を見て、私は

矢張りそれらの石は遠くからではなく、花崗岩の成分中の雲母質と結びつけて、その地のものであらうことを想像した。

しかし、こんなこともどうでもよかつた。私は地質学者でもなく、史蹟の新たな発見を期待して来た歴史家でもない。

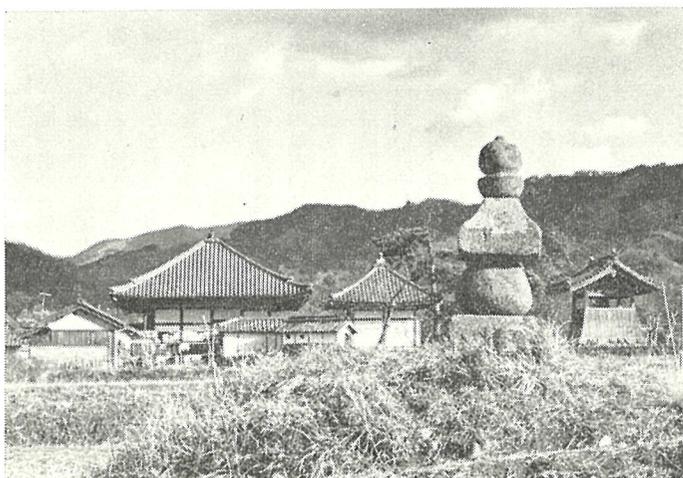
私は極力、無心でそれらに近づきかけた。石舞台の巨石の異様な雰囲気から、少しでも往古の人々の気持を素直にその儘、感じたかつたのだ。

ところがここで、私は先ず戸惑つた。それは同行した学生たちの数人が何より先に嬉嬉として、その巨石によちのぼつたのである。その有り様は遊園地の滑り台に駆け上る子供たちを連想させた。それは余りにも無邪気で嬉々とした行動だつた。若い学生たちをのぼりたいという衝動にからせたこの巨石は、それらを積上げた太古の人々をして、わずかでも同じような衝動を覚えさせただらうか。

古墳ともなれば少くともそのような行為は許されなかつたに違いないが行

動と心の内部での衝動とは異なる。

私は、そのような無頓着さの中にも現代の人間の本性があるようにも思え、様々な現代の現象と関連させて不思議な気持になつた。



入鹿首塚



飛鳥大仏

巨石の下の地面に埋れた部分には、石壁で囲まれた冷たい大きな空間があった。中側から見上げた時、石と石との隙間からもれる外気との境に、かすかに古人の暗い息づかいを感じた。私にはこのような時、衝動通りに行動する勇氣もなく、だからと言ってそれを押える程の知識を持合せようとも思わない。ただ、私は無心で近寄りたいただけであった。

大仏、近來の観光時代に入って寺院や仏像が、その本来の意味以外に余りにも安易に一般の眼前に露け出され始めた。そしてわれわれはそれらを見て、感ずる以前に、様々な雑念や雑知識で接し始めたのだ。その悪

循環が、知らぬ間に徐々に徐々に、それらの秘めている偉大な驚きを見出し得なくなるまでにして仕舞った。

単なる知識から生れた感情は余りに無味乾燥だ。ところが今の世の中にはその無味乾燥な知識人が多過ぎるし、その程度の知識慾が多過ぎる。

日本で展覧されたあのミロのヴィナスにいい例があると思う。知るために、人々は美術館の前に馬鹿気た長蛇を並べた。少くとも私は、あの場所で見なかったことを誇りにさえ思ってもいい。心の中の私のミロのヴィナスはまだ汚されては居ないのだから。

美しさは知ろうとした時には、すでに遠のいて居る。美しさは黙って居れば感じて来るものだ。お祭り騒ぎのように混雑した美術館の中で、どれだけの人が本当に、あのヴィナスの美しさに溺れ得たらうか。そして、どれだけの人々がただ知ったことだけで満足して帰って行つたらうか。

あの時のミロのヴィナスよりそこの野辺の仏たちに、どれだけの浸み込んで来る心が漂って居たかを感じ得る方が大切だと思う。美しいと教わらなくても美しさは心に浸み

て来るものだ。本来、それを感じ得るのが、人間であった筈ではないだろうか。

そして、私にも、その雑念や雑知識が、感ずると言う上に、如何に邪魔であろうかという一つづくく思い知らされることに出会わせた。

明日香の里の代表として知られる安居院の日本最古の飛鳥大仏を見た時のことだ。これは幾度か火災に会い、後世の補修がほとんどで飛鳥時代のものはごく一部にしかとどめて居ない。それは眼、指先等のほんの微かな部分だが、時代の面影は充分それだけでもうかがえる。

ところが、私はこれを初めて眼の前にした時、その稚拙さに驚くよりあきれ返った。これは旧国宝である。前述の一部を除いた部分を素焼に着色して補修してあるとのことだったが、それが今日の彫刻家の目からすると技術的にも造形的にも余りにひど過ぎて、いささか落胆さえ覚えさせた。

その時、住職がその仏について語り始めたのだ。日本書記にあるそうだが、その大仏が鑄造され、出来あがって本堂におさめられよ

うとして居る時の様子は、その古き時代の、
のどかな村里を、少しづつ、少しづつ動きな
がら寺に近づいて来るであろう、おおらかさ
と相まって、聞いて居るわれわれをしてその
時代にまで引きもどすに充分な雰囲気を帯び
ていった。

そして、再びその大仏を見上げた時、今ま
での稚拙さが、逆にたまらない魅力となつて、
私をよみがえらせた。私の知識からだけだつ
たら、そのような拙劣なまでにとつた補修
は我慢の出来る範圍を越えて居たのだが、仏
としての美しさが、何時の時代か、その補修
したたの人々の純粋な仏心の中で完全に昇華
して、矢張り見るものの心にも、それを充分
に伝えて来たではないか。国宝だから美しい
のではない。私は美術史家や美学者の知識に
は感心するが感覚だけは信用しない。だから
そのような意味で、それらの人たちが主体に
なつて決めてあらう国宝の仏たちの総てが美
しいと言ふことには關係のないことはもちろ
んだ。

しかし、私の心には、初めに単なる知識と
して知つて居ることが覆つて居た。
それに加えて、その大仏しか見るべきもの

を持たない荒れかけた寺は、矢張り京都や奈
良の觀光寺のように、しめつた飛鳥センベイ
なるものや極彩色の絵はがきを並べて居た
し、決して、いい気持で仏の前に立つた訳で
はなかつた。

ただ、その寺の在る周囲の風物が、私の夢
に見た明日香の里として、完全なまでには、
落胆させるほど、失せては居なかつたまでの
ことだつた。身体の底まで伝つて来る本堂の
板間の冷たさは、ややもすると私の心まで冷
え切らそうとさえたのだが。

私の浅い知識や雑念が、住職の話をきつか
けとして、何時の間にか消え失せた時に、仏
は、この上もない、おおらかさで私の眼の前
に在つた。後日、再び訪れた時に、さらに多
種のセンベイや絵葉書が並んでさえ居なけれ
ば、私は又、静かに心を触れ合せ、恍惚と溺
れ得る仏を見出し得ると確信して居る。

知らうと思う以前に先ず感ずればよい。感
じたことを更に深めるために、また更に深く
感じ得るために知識は必要だらうが人間には
感ずることの方が先にあつた筈だ。私は総て
の方向から語り得るだけの整然たる論理に欠

ける。なでまわし、なめまわし、そして唯、
じかに触れて来るものだけを大切にしようと
する。そんな人間が幸いにかどうかも自分で
は分らない。

落ちかけて来た陽を斜めに受けながら、広
い田んぼの中に、入鹿の首塚が一つ、ぼん
とこけむした五輪を重ねて居た。馬子の石舞
台と違い、平地に、それはあつて、思いがけ
なくも明るく立つて居た。石舞台付の冷たさ
もなく、ほとんどの学生たちにも気がかれず
に、ただ小さく静かにそれは在つた。

その時の私は、巨石の異様な迫力にも優つ
て浸み込んで来る何ものかを、心の中に繰返
し、繰返し、しまい込んだ。

そしてますます、私も含めた不可解な人間
共のあがきを、どうやって誤魔化して行つた
らいいものだろうかとさえ思い始めていた。

何時の日か、いかるがの里のように、香り
失せた明日香の里を悲しむのも感傷かも知れ
ないが、私の心の中の明日香の里は、何時ま
でもあの古のおおらかさのあふれた日本人の
心の故郷であつてほしいと思ひ、少くともそ
の香りを忘れ得ない私の心であつてほしいと
思つた。

(校友・彫刻家・京都美大講師)